

■ 書 評



保崎秀夫著作集 I 心の病気とは何か/統合失調 症の概念

保崎秀夫 著
濱田秀伯 編集・解説
発行：群馬病院出版会/
発売：弘文堂 2011年5月
232頁，定価 3,150円



保崎秀夫著作集 II 精神病と神経症/診断と治療/ 歩んだ道

保崎秀夫 著
濱田秀伯 編集・解説
発行：群馬病院出版会/
発売：弘文堂 2011年5月
248頁，定価 3,360円

最近の出版事情を見渡せば、異色にして出色の論文集である。1968年から91年までの24年間、慶應義塾大学医学部精神神経科を率いた著者の、18篇の論文が収められている。大所帯の伝統ある医局にふさわしく、この医局の教授の人選には、とりわけ広範囲の臨床への高い見識を重んじる伝統がある。18篇のそれぞれは、その伝統に呼応し、精神医学全般にわたる巨大な氷山を思わせる著者の洞察のうちのほんの一角のみが顔を出しているような、珠玉の論文である。それだけに、編者の濱田氏が解説で述べられているように、これらは「読む人の学問レベルをはかる里程標」である。はらりと書き落とされた一文の含蓄に評者自身の経験も学識も追いついていない危惧がある。かといって若い精神科医に放っておかれては実にもったいない書である。

評者は著者の生の講演を聴く機会を得たことが一度だけある。それは精神病理学会における特別講演で、記憶という観点から多彩な疾患領域の多数の症例を説き起こしたものだ。この論文集では「記憶障害の臨床—症例から—」という章に所収されている。ところで、今それを読み返してみると、評者が当時はその講演の要所をまるで理解していなかったことに恥入することになる。ここには、今日の手続き記憶、エピソード記憶などの概念の萌芽となる症例、新海氏の賦活再燃療法提唱のきっかけとなった症例、躁うつ病患者が過去の病相を振り返るときの感情のあり方の複雑さ、統合失調症患者において過去の自分にふりかかったエピソードが時空を超えて現在に侵入してくるあり様など、ひとつひとつが長大な論考となるような事例、論点、数行で散りばめられているのである。しかし、そのような論点にさしかかったかと思うと、著者はもう次の事例に移って行かれる。

著者の論述の特徴として、器質性、症状性精神病、神経学領域への確固とした基盤があり、そこからさっと、ヒステリー、心気症、セエストパチーといった、心理的側面の強い領域に移っていくところがある。シャルコーとフロイトが出会った時代を彷彿させる、あえていえばフランス流のスタイルということになるであろうか。そして、結論として、いちおうは単一精神病論的ネオ・ジャクソニズムをとると言っておられるようであるが、それを絶対ともされていないようである。

含羞の人であるらしい著者が、珍しく真剣に教え諭すように説き起こしている章に、精神鑑定についての章がある。濱田氏の解説によれば、なんと222例を発表されているそうである。この章では司法関係者とのやりとりでの心構えにまで言及されている。一方で、これまた途方もない守備範囲のレビューワークが、症状精神病、統合失調症の概念の歴史と分類などについてなされている。無理に訳すと野暮になる独、仏、英の専門タームがそのままになっているのも、実に著者らしいスタイルである。

(津田 均)